
魔法少女リリカルなのはStrikerS 2人の青年

暁 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 2人の青年

【Nコード】

N5168S

【作者名】

暁 零

【あらすじ】

平凡な学生生活をしていた2人の青年。だが、いきなり理由も無く謎の宝石により飛ばされ、気が付いた場所は、異世界ミッドチルダ。

そこで一人の青年は、高町なのは（エースオブエース）をはじめとする機動六課の面々と出会い、共に戦う事で揺るがぬ「絆^{つながり}」を作っていく。

一方で、もう一人の青年が出会ったのは、「無限の欲望」と謳われた危ない科学者と、個性溢れた12人にも連なる姉妹達。そして

かんりきよく正義を倒すべく彼らに協力をする青年。正義と悪。

白と黒。敵と味方。互いに正反対の立場で、戦いに身を投げる二人の青年。

彼らの行く果てにあるモノは？ 互いにぶつかり合う“正義と悪の信念”の先に待つモノは？ 彼らの未来に有るモノとは一体？

そして、物語は始まる - - - - -

「魔法少女リリカルなのはStrikers 2人の青年」始まります。

作者の処女作です。二次創作が嫌いな方、オリジナルキャラ入が嫌いな方は回れ右をお願いします。初心者ですので、誤字脱字・設定の間違いなどは考慮してお読みください。拙い部分もあります
が、よろしく願います。不定期更新になります
ですが、よろしく願います！

プロローグ（前書き）

初投稿、初の処女作です。
しました。

他の作者様達に影響されて連載を開始

つたない部分もありますが、
よろしくお願いします！

ブローグ

ピリリリリ・・・

目覚まし時計の音が部屋に響く。

時計は、朝の8時を指し、窓からは忙しく動く会社員や学生の姿が見える。

「う・・・ううん・・・」

そんなうめき声の一つ。

眠り足りないのかそれともまだ寝ぼけているのか、彼のみぞ知るであるが、

ベッドから抜け出した彼はのそのそと鏡に向かい、自分の顔を見る。

寝ぼけ眼のまま、洗顔をし、髭を剃る。

「・・・ん、バツチリ・・・うーん・・・良い朝だ・・・」

布団から飛び出た手が、力無く時計のアラームを切る。

「う．．．あゝ．．．寝みいなゝコンチクショ！。 飲み過ぎて
チャンポンしちゃったか．．．？」

力無く窓のカーテンを開け、力無くベットから降りて、力無く手洗
い場の鏡に向かい、ゆるゆると洗顔と髭を剃っていく「彼」。そ
して、最後に鏡を見て前髪を掻き上げつつ一言。

「さて。 今日頑張るとしようか．．．」

肩より少し長いややセミロングな黒髪を後ろで縛り、切れ長の鋭い、
意志の強そうな「鷹の目」とも
呼ばれるかのような黒い眼を持った青年。

そつぎタツヤ
蒼月竜哉

彰と同じ大学で高校から付き合いのある親友である。 ちなみに、
歳は同じ。

だが、今の彼は寝癖とジト目が半端ないほど酷い有様になっている。

ピリリリリ．．．

携帯のアラームが鳴る。

「．．．．．ああん？（怒）」

「誰だ．．．？ オレの眠りを妨げる奴は．．．？ ヒネリ潰そ

うか・・・？」

という物騒な事を言いつつ、画面に目を移す。

「ん・・・？ 電話・・・？ 彰から・・・？」

パカ

「もしもs・・・。」

『おーーはよーーうー！ 竜哉君！ 今日の良い天気d・・・』

ブツツ ポイツ ゴロン。

・・・・・・見ていない。 オレは何も見っていない。

あれだ。 これは・・・そう、単なる幻聴だ。 幻聴が聞こえるほど飲み過ぎたんだ。

はっはっは！ オレのうっかり者め！

さあ、今すぐ携帯を置いて、温かいベッドにダイブして寝なおそうk・・・。

ピリリリリリリリ・・・！！！！

「・・・・・・・・・・・・・・・・（怒）」

ガシッ カチッ ピッ

「・・・・・・・・・・・・・・・・もしもし？」

『わ〜ん。俺が悪かったよ〜〜〜だから話聞いてくれよ〜』

「だが断る。」

『何でさ！？』

「だるい。めんどい 酔った。うざい 寝みい 精神的に受け付けない。」

『酷ッ！？ てか話を聞いてからにしろって！！』

「・・・・・・・・・・・・・・・・ハア。で？ 何の用？」

『大学が休講になったんだよ！ つー事で、やること無いし遊びにでも いかない か？』

「・・・・・・・・・・・・・・・・切っても良いか」

『わ、解った！ ふざけないから切るな！』

「はあ・・・・・・解ったよ。で？ どこに行くのさ？」

『駅前に新しい店できたからそこに行こうぜ！！』

「ああ・・・あの噂の店か。了解。じゃ、後でな。」

ピッ

「・・・・・・・・・・さて、身支度するか・・・めんどいけど」

と、言いつつもまんざらではない顔をして身支度をする竜哉であった・・・・・・・・

「で？ 場所どこなんさ？」

「えゝと、確かこの辺に・・・・・・・・」

「おいおい・・・・・・・・そんなおぼろげで大丈夫か？」

「大丈夫だ。問題無い」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「わ、解ったから、その殺気だっている目と握りしめている拳をやめてくれ！！」

場所が変わって新都。

喧騒と人の行きかが目立つ摩天楼の下に、翔と竜哉が並んで歩い

ていた。

服装は、翔は七分の黒いズボンに大きめの黄色いバスケットウェアの上に、

フードが付いたノースリーブ形式の白いガウン。 エメラルドブルーに輝くチェーンネックレスと右手中指に同じ色の指輪。

竜哉は、白いノースリーブの上に黒い半袖のジャケットに藍色のゆったりとしたズボン。

左手に拳大の黒いリストバンドをして、紅色の髪止めで後ろ髪を結っている。

性格は真逆でも、どこか似たりよったりの二人である。

二人が意気投合し、親友になれたのも、似た者同士だからこそだろう。

「んで？ 何で背中に木刀背負っているんさ？ しかも2本も」

翔はジト目で竜哉を見る。 竜哉の背中には白と黒色の二つの木刀を小脇に抱えている。

「単に店見るだけじゃつまらないし。 後で河原で模擬戦でも思っ
てよ」

「うへえ……。 厳しいぜ……」

「文句言わない。 ああ、翔。 悪いけど一本持っていてくれ。」

「どっちの方？」

「白い方」

「あいよ。」

「さあ、さっさと探そう。」

「合点承知！」

数十分後……

「ここか？ 何か薄気味悪いな……」

「まあまあ。早く入ろうよ」

探し求めて数十分。

漸く場所を見つけた二人。

3階建ての何の変哲もない質屋のような店だが、

いかんせん、何か薄気味悪さを漂わせている……。

「そうだな……ん？」

そんな中、道端に何か光るものが……

「ん？ あれは……………？ おい、翔……翔！」

「何ー？」

「ちょっと。これ……」

「んー？」

見せたのは、淡く輝く二つの玉であつた。

見た目はビー玉と変わらない、何の変哲もない玉。

それぞれ、白と黒に分かれた球となっており、翔が白、竜哉が黒を持っている。

「何なんだ……コレ？」

「オレに聞かれても……………」

ピカッ……………

「ん？」

「どつたの？ 先生？」

「先生つて……。いや、何か光ったような……………」

ピカピカツ・・・・・・・・

「見間違いじゃないのー？」

「でも、確かに・・・・・・・・」

ピカツ！

「「！？」」

ピカピカピカツ！！

ピカアアアアア・・・・・・・・！！！！

かすかに点滅したと思いきや、今度は激しく光りだす二つの球。

「な・・・何だこれ！？」

「だから言ったのに・・・・・・・・。とりあえず逃げるぞー！！」

「お、おう！」

球を放り投げ捨てて、慌ててそこから逃げ出す二人。

しかし、閃光は二人に向かって迫ってくる。

「翔！ 早くにげる！」

「無理無理！ 何かあれ、俺達の方追いかけているから！」

「何イ！？」

必死で逃げて抵抗するのも空しく、閃光に包まれていく2人

「「うわあああああああああああああ………」」

眩しい光が辺りを照らし……

光が消えた時……

二人の青年が姿を消していた……

プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ベタ過ぎる始まり方で申し訳ありません・・・

こんな感じで捻りがないかもしれませんが、これから宜しく願いします。

次回は・・・

「どこだよ、ここ・・・」

「時空管理局の高町なのはです。 あなたを時空漂流者として保護します。」

「俺は、あまとカケル天斗翔 気が付いたら此处にいたんだ」

「どこ、どこ？」

「私はジェイル。 ジェイル・スカリエッティさ」

「オレは、蒼月。 蒼月竜哉。」

次回、「異世界ミッドチルダ 二人の接触」

お楽しみに！

接触翔ver. 1（前書き）

今回も、難産でした・・・。

それはさて置き・・・！

でわでわ、本編スタート！

10月26日 一部改編しました。

接触 翔ver. 1

「うう……ここは？」

翔が意識を取り戻した時、周囲は静寂に包まれていた。

それもさっきまでとは違い、聞こえていたはずの喧騒や賑わいが全く聞こえない。

しかし、それよりも翔が違和感を抱いたのは周囲の光景であつた。

「一体どこだここは？…どう見ても新都……紅ヶ原くれないがはらとは違う……」

翔は起き上がり、周囲を見回してみる。

そこはあきらかに自分がさっきまでいたとは違つていた。

辺りを呆然と眺め、そしてある事に気がついた。

「そうだ…竜哉は？！竜哉！竜哉！」

翔はさっきまで一緒に居た筈の親友の名を呼ぶ、しかしそれに答える者はなく、周囲にそれらしき影も見当たらない。

「竜哉とはぐれてしまったな…。そうだ！携帯を……。け……。圏外！？」

「嘘。ここ電波ないのかよ！？」

あちらこちらへと、携帯をかざす翔。

「弱ったな……。」

携帯をかざして数分後溜め息混じりに悪態をつきつつ胸元に仕舞いつつ、ちらりと所持品を見る翔。

そこには、彼の携帯と竜哉から渡された白塗の木刀、多くは無いが十分の金額が入っている財布、そして、隅に転がっている、先ほど拾った白い球しか無い。拾い上げて翔はつぶやく。

「……この球のせい……なのか？」

「何なんだ……？ こいつ」

でも、と呟き、頭を掻く翔。

「連絡手段が無いしな……。どうしようか……。ん？」

改めて、周囲を見回す翔。

辺りは埃っぽく、薄暗い。それでいて、どこか朽ち果てられたビルの室内に居るようだ。

窓へと歩んで行き、眺める。所々まばらに、ビルはあるものの、翔自身が居るビルと何ら変わらない形状をしているようだ。

「廃棄都市……。何かかな？」

正直、漫画みてえだと　　呟く竜哉の声が入っ子一人いないビルの室内に、翔の声が響く。

「もしかしたら、下に行けば誰がいるかも……。そうとなれば早速行ってみますか！」

思いだった。が吉日と、翔は近くの階段へと向かい、下へと歩いていった。

コツツ　コツツ　コツツ…………

誰もいないビルの屋内に、靴の音が響く。

「……………やっぱ誰もいない、か…………」

人っ子一人いないビルに、翔の音が響く。

と、そこで何か物音が響いた。

「あれは…………！」

音が鳴る方へと走っていく翔

「な、何だ　こいつ？　一つ目オバケか？」

翔の前に現れたのは、丸みを帯びた、そう、ちょうど卵のような形に、真ん中にカメラらしきモノを搭載したへんてこなロボットだった。

微かに、機械音を鳴らしつつ、カメラから光線を放ってきた。

「うわ!？」

慌てて避ける翔。光線は、留まること無く翔へと襲いかかる。

「どうやら、話聞くような状況じゃないし・・・」

「やるっきゃない、か!」

諦めが混ざった台詞を口にしつつ、右手に近くに転がっていた鉄パイプを持ち、腰に木刀を下げる。

財布等は邪魔にならないようバッグに詰め、脇へと放る。

「おらあ!」

上段から、両手でを持ち、思いっきりロボットの頭上へと振り下ろす。

が、しかし・・・

「クソ、固いなこいつ・・・」

余りの固さに、少し手が痺れる。

もう一度振りかざそうとしたその時に！

パキン！

「う、うわ！？」

そんな、鉄パイプが折れた！？」

ロボットの余りの装甲の固さに、鉄パイプが先に音を上げた。

いまや、翔の背丈ほどあった鉄パイプは、半分に裂けて、腰辺りまでの長さになっている。

好機と取ったのか、ロボットの攻撃はさらに苛烈を増していく！

必死に攻撃を避ける翔。

「いちかばちか……」

：

ウーン……

ロボットは光線を放出するのを辞める

ロボットの動きが止まり、辺りを見回す。

辺りは、先ほどの光線により、砂埃が立ち、視界が悪くなっている。

カキン！

「！？」

後ろから何かが当たる音。

ロボットは後ろを向いて、光線を放つ。

しかし、そこに有ったのは、先ほど自分が壊した鉄パイプのみ。

そして、次の瞬間――――

「せーのっ！」

ズガンッ！

何かが突き刺さるような音が響いた。

ロボットが見たのは、

倒したはずの相手が、正眼に構えた木刀を、

カメラアイへと突き刺した翔の姿だった。

ザザツ・・・ザーーーーー・・・

カメラにノイズが走り、ロボットは活動を停止した・・・

ズルツ・・・ カツンツ・・・

「ごほつ ごほつ・・・ や、やったか？」

木刀を引き抜き、付いた油を払い、壁にもたれて息を吐く翔。

体のあちこちから血が流れ、服は埃でボロボロ。

幸い、重傷は負って無くとも、木刀を杖代わりに床に突き刺し、息も荒い。

ロボットのの方は、バチバチ放電こそすれ、取り敢えずは襲ってこなさそうだ。

「何とか倒したな．．．でも、こいつ機械だったのか．．．

というか、一体こいつは．．．．．」

ガシャガシャガシャ！

「チィ．．．．．！」

何処からか音が響き、現れたロボット達に歯噛みをし舌打ちする。

「さっきの奴と同類か？ 次から次へと．．．．．」

傷を負った身体に鞭を打ち、木刀を構える翔。

「面白エ．．．．． かってこいよ！」

そう言い放ち、ロボット達へと躍りかかった。

翔がロボット達へ躍りかかって約2時間程経過した頃

「これで．．．．．！ 17体目エエエエエエエエエエ！．．．！」

木刀を振り上げ、17体目を藻屑にする翔。

先程よりも傷が多くなっており、右肩と左足にかんしてはかなり赤くなっている。

やや左足を引きずるように動いており、どうやらレーザーが貫通したようだ。

そんな翔の姿にも関わらず、ロボットはさらに多くなってきており、数はおよそ30体はいるだろう。

「クソ、しつこいな……………」

「まあ良い、纏めて……………」

ぼろぼろの状態にも関わらず、額から血を流し、左目を薄ら赤くさせながらも、木刀を正面に構える翔。

「ぶっ潰す!!」

さらに、斬りかかろうとした時……………!

「!？」

頭上から桃色の丸い弾がロボットに襲いかかり、殲滅してゆく。

「ふう、危なかった。駄目だよ、ここは関係者しか入れない所なんだから」

聞こえてきたのは、若い女の声。

頭上を見上げると、白を基調とした服を纏い、杖らしきモノを携え、栗色の髪をツインテールにした女性がいた。

……………宙に浮いたままで。

「えーと……。 Who are You? てか、何で宙に浮いてんだ……。?」

至極当然の事を口にする翔を背に、ゆっくりと床に降り立つ女性。

「ふうー、よかったあ！ビルの中で魔力を観測したってはやてちゃんから聞いたから、ガジェットに襲われているのかと思ったけど、どうやら間にあったみたいだね！」

思わぬ人物に翔が驚いていると、少女が翔の下に駆けつけてくる。

「そこの貴方、大丈夫ですk……。」

女性の言葉は途中で止まる。

何故なら、……

女性に、木刀の切っ先を向けた翔が立っていたからだ。

接触 翔ver・1（後書き）

くそう・・・一話で終わらなかった・・・orz

もう少し、プロローグは続きます。

まだ、もう一人の「彼」がいますしね・・・！

不定期になりがちですが、読んで頂けると幸いです・・・。

接触 翔ver. 2 (前書き)

なのはと出会った翔。

そして・・・！？

接触 翔ver. 2

翔が女性 - - - - - 高町なのはに会う数
時間前の事

side:nanoha

私、高町なのはは、廃棄都市の方へと全力で飛んでいる。

そう、それは、数時間前の事

「魔力反応？」

『せや。一瞬やったんやけど、結構大きい魔力反応があったんよ』
通信越しに、9歳からの親友であり、所属している「機動六課」の
部隊長、八神はやたと話す。

「すぐに消えてしもうつたんやけど . . . 。流石に無視するには不気
味やからな

本当は、ヴィータかシグナムに任せたいんやけど、生憎二人は本局にお使い中やから……」

「大丈夫だよ はやてちゃん」

通信越しに真っ直ぐはやてを見るのは。

「私が今すぐ出るから。」

強い意志を宿した瞳で言うのは。

「さすがは、「エースオブエース」やな。局内で言われておるのは、伊達ではないようやな。

ほんならなのはちゃん、そう言う事でよろしくなあ」

……ってはやてちゃんから言われたんだけど……

「この辺りの筈なんだけどな……レイジングハート、近くに生命反応は？」

「南東2キロ地点に、人と思われる生体反応を確認しました、S i

先程までの茶色の制服姿ではなく、今はバリアジャケット・・・アグレッサーフォームを身に纏っており、茶髪もツインテールになっている。手には十年來の相棒、レイジングハート・エクセリオンが握られており、なのはからの問いに即座に答えてくれた。

「ありがとう、それじゃ、急ごうか。」

そう言うと、なのはは飛ぶスピードをさらに早くした。

周囲の景色はすごいスピードで流れていく。

しばらく飛行を続け、先程レイジングハートにサーチしてもらった廃棄都市付近に到着した。

魔力の持ち主が移動しているのか、微かに遠くに魔力を感じる。

「どこにいるんだろう・・・」

なのはは辺りを見渡す。何かを探すのには少し苦労ではあるが、先程のポイントから移動はしていないようなので、見つけるのは時間の問題だった。

そして・・・

！ マスター！ ガジェット反応をキャッチ！ 生命反応の近くに！

「ガジェット！？ 場所は！？」

「ここから北西に1 kmです。行きましょう、マスター！」

「うん！」

さらに数十分後・・・

「見つけた！」

北西に1 km。 なのはは、廃棄都市にある幾つかのビルの内の一
つにガジェットの群れを発見する。

「ロングアーチへ、こちらスターズ01。六課から北西1 km地点
でガジェットを・・・」

ちょっと待つてあれは……………」

ガジェットに紛れて見えづらいけど……………」

黒みがかった茶髪の男の子……………」

あの子が、はやてちゃんが言っていた魔力反応？

というか……………生身で戦闘している！？ ガジェット相手に！？

「スターズ01からロングアーチへ。 ガジェットと戦闘中の青年を確認。」

これから、ガジェット討伐と少年の確保に移ります！」

なのははすぐに六課本部に通信を入れ、状況を報告する。

『了解や！なのはちゃん、ガジェットの討伐と、男の子の確保、お願いな！』

「うん、はやてちゃん。」

そうしてなのはは、通信を手早く終える。そして、右手に魔力を集中させる。

「ふう、危なかった。駄目だよ、ここは関係者しか入れない所なんだから」

そう言って声をかけるのは。

青年は、先ほどよりもさらに驚いた顔をして呆然としている。

それをしり目に、なのはは青年が無事な事を確認し、笑顔になる。

「ふう、よかったあ！ビルの中で魔力を観測したってはやてちゃんから聞いたから、ガジェットに襲われているのかと思ったけど、どうやら間にあったみたいだね！」

青年が無事だった事に喜びつつ、怪我と身柄を聞こうとなのはは青年に近づく。

「その貴方、大丈夫ですk・・・」

ギンッ・・・・・・・・・・

そして、今……………

木刀を突き付けられ、戸惑いを見せる女性 高町なのはと、

冷徹な表情を浮かべ、木刀を突き付ける青年 天斗翔がいた。

険しい顔のまま、翔は尋ねる。

「……………助けてくれた……………のはお礼言っけど。 生憎、知らない所に飛ばされて

何がどうなっているのか解らないまままで話進めないで欲しいんだよね……………。

いつの間にか、知らない場所にて途方にくれていたとこなんだよね……………。

「

話している言葉は普通。だが、言葉の一つ一つに、警戒しているのがはつきりとなのは感じた。

「でもまあ、女の子に会うのは知らなかったけど。」

と言い、疑うような眼をする翔。

「っーか、何？ その格好。 コスプレか何か？」

「コスっ……!？」

なのはは固まってしまう。

（コスプレって……この子、バリアジャケットを知らない？
というか……。）

（多少自覚はあったけど、コスプレはキツイなあ……）

内心、ショックを受け嘆いているのはであった……。

そんななのはの心境を知らずに、翔は問いかける。

「で？ アンタは敵なの？ 違うの？」

「え……ええつと……」

翔に尋ねられ、しどろもどろになるのは。

「まあ、・・・どうやら、敵、じゃなさそうだし」

ポツリと呟くように言い、クルクルと何度が回し、木刀を腰に下げる翔。

「んで？　ここが何処で、アンタは誰なのか、説明してくれる？

てか、ここ紅ヶ原じゃないの？」

「え？　えと・・・ここはミッドチルダだけど・・・」

「ミッドチルダ？　どこよ、そこ。」

「ふえ？」

返ってきた答えに、なのはは素っ頓狂な声を上げる。

「もしかして・・・」

顎に手を置き、考えるしぐさを見せるなのは。

「次元漂流者なのかな・・・？」

「次元漂流者・・・って何さ？」

数十分後・・・

「すると・・・あれか。話を整理すると、ここは俺が居た紅ヶ原ではなくて、ミッドチルダという異世界で俺は次元漂流者という大きな迷子。でもって、原因は解らないけど、飛ばせてしまつて、ここにいと・・・。」

「大きい迷子って・・・でも、そういう事になりますね・・・。」

詳しい事は私たちが調べますから、取り敢えず六課に・・・

「そうだな、解らないままだし・・・。」

翔も同意の意を示し、バッグを持ち、なのはの元へ行くつもりも、小さく呻き膝をついてしまう。

「痛ッ……………」

「!?　もしかして・・・怪我しているの!？」

なのはが見やると、左肩に血が滲んでいるのがうつすらと見える。

恐らく、ビームに当たったか、ガジェットの攻撃を受けて壁に激突したのだろう。

「こんなの、ただのかすり傷だよ。　ほっといたら直ぐ治るし」

気にも留めずに、歩こうとした矢先に

「背負います」

「んな!？」

翔は、驚いて声を上げる。

「ちょ　待てよ!　何で背負う必要があるんさ?　かすり傷だって

言つたる!？」

「かすり傷であれ、悪化したら大変だよ？ それに、私これでも、管理局員だから！」

「・・・・・・・・・・」

あっけに取られて言葉を無くす翔。

女性に背負つて貰うとは何と羨まs・・・ ゲフンゲフン

今、彼のプライドと思考が猛反発しあっている事だろう・・・

しかし、ガジェットと相手どり翔が傷を負ったのは事実であり、彼の体力はほとんどゼロに近い状態になっている。

数分、翔は悩んだ結果・・・

「・・・・・・・・・・じゃあ」

「ん？」

「・・・・・・・・・・じゃあ、お願いします・・・・・・・・」

素直に背負つて貰う事にした。

辺りはだんだんと暗くなっていた。

茜色に輝く夕焼けを背に浴びて、翔を背負ったなのはが飛んでゆく。
愛機であるレイジングハートは、待機状態にしているため、なのはの胸元で鈍く光っている。

「あのさ……………」

「ん、何？」

ポツリと尋ねた翔に顔だけ動かして反応するのは。

「……………重くない？」

「全然」

「……………そっか……………」

小さく溜息をつきつつ、なのはの頭越しに風景を眺める翔

「もしかして……………気にしてた？」

なのはに言われ、翔はそっぽを向きながら答える。

「あまり言つな．．．．．」

．．．．．恥ずかしくて照れる．．．」

「．．．．．ふふ」

なのははクスリと笑つて、六課を目指した。

接触 翔ver. 2 (後書き)

や、やっと翔のプロローグが終わった・・・

後半の甘々な部分は・・・

反省はしている、だが後悔は無い！(え

今回は、本編では無く、出番が少なかった「彼」のプロローグとなります。

お楽しみに！

接触 竜哉ver. 1（前書き）

青年は、エースオブエースと出会った。

そして、同時刻。

もう一人の「彼」も、彼らに出会った。

*少し、書き方に違和感を覚えた為、他の作者さんの書き方を参考に、

実験的に書き方を少し変えてみました。 見づらかったら訂正します。

接触 竜哉ver. 1

「・・・・・・・・いつ・・・・・・・・てえ・・・・・・・・」

ぶつけた頭を押さえつつ、立ち上がる竜哉。

「どこ、どこ？」

辺りを見回す竜哉。　どうやら、通路に居るらしい。

「！　翔？　翔！！」

先ほどまで居たはずの親友を探し、辺りに呼び掛ける竜哉。

「ちい・・・・・・・・　連絡は・・・・・・・・」

悪態をつきつつ、携帯を出し画面を確認するも、すぐにしまつ。

「圏外、か・・・」

ポツリと呟いた。

そうして、足元に散乱している財布や木刀等の貴重品が入ったバッグと、足元に転がっている黒い球を見つけて、目の前に持ってくる。

「こいつのせいか・・・・・・・・？」

鈍く光を放つ球を見ながら、竜哉は呟く。
そうして、頭を掻く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・全然訳わかんねえ」

黒い球が原因らしいが、どうして、何故此处に移動したのかが全く解らない。

「・・・・・・・・取り敢えず、動くところ・・・・・・・・」

竜哉が歩こうとした矢先、

突然、警報のような音が鳴り響いた。

「！！ 何だ！？」

音は、どんどん大きくなってゆく。

「オレが・・・・・・・・オレが原因なのか？」

辺りを警戒しつつ、竜哉はポツリと言う。

もし、原因なら、此处で立ち止まっていると非常にヤバイ。

「だとしたら・・・・・・・・」

竜哉は呟きつつ、速足で歩きだす。

脚はだんだんと早くなり、そうして、

「I w a n n a R u n a w a y ! (逃げる!)」

思いっきり床を蹴って、竜哉は走り出した。

此処はどこで、帰る方法などを考えるのは後回しだ。どう進めば出口に辿り着けるのかなんて、考えてる余裕も時間はない。とにかく走る。 走るしかない!

竜哉は出鱈目に走って必死に出口に向かう。

やがて、通路の先に一筋の光を見つけた。

「あれが出口、か・・・?」

根拠なんてない。 だが、竜哉には言い知れぬ確信があった。

出口と思われる光に向かって、一直線に走る。

出口まで後数百メートル。

もう少しで外に出られる、と思った時、信じられない事が起こった。

「!?!? 何だあれ!?!」

目の前に見えた物体に、竜哉は驚愕する。

それは、翔がなのはに出会った時にも現れたロボット……ガジェット・ドローン

カプセルをそのまま大きくしたような物体で真ん中に黄色い球体がついている。

しかも、宙に浮いてる。

見た感じは、

「一つ目ポストか……?」

……偶然かは神のみぞ知る、翔とまったく同じ印象を抱く竜哉。

カメラアイを向けるガジェット・ドローン

どうやら、竜哉を狙っている様子らしい。

「チィ…… 何でかはしらねーけど……」

走りながら舌打ちをし、小脇に抱えていた黒塗の木刀を抜き、逆手に持つ。

ちなみに、貴重品等は背中に背負ったバッグに入れているから問題は無い。

「邪魔……」

光線を放つガジェット。 だが……

「するな！」

竜哉は壁を蹴ってかわし、そのまま、ジグザグに壁を蹴りガジェットに向かい、
横なぎに木刀を払う。そうして、

閃！

一閃の元、ガジェットを斬り倒した。

斬られたガジェットは、バチバチと放電をしながら、

ガシヤアアアアン・・・・・・・・

真っ二つに別れたまま活動を停止する。

チラリとそれを眺め、にやりと笑い出口を目指す竜哉。

そのまま、出口に向かっていく竜哉だったが・・・

グニユウウウウン……

突然、右側の壁から一人の女の子が現れた。

「!!!？」

堅い壁から、人間がすり抜けるように現れたという信じられない現象を目の当たりにして、竜哉は思わず足を止めた。

「つつかまゝえた」

可愛らしい声と共に、女の子は竜哉を捕まえた。

「わっ、クソ……離せ この……!!!」

女の子と体が密着して、竜哉は顔を真っ赤にして興奮と混乱がごっちゃになる。

「セイン！捕まえたっスか？」

すると、走ってきた方から別の女の子がやってきた。

「捕まえたよ」

竜哉を捕まえた女の子 セインが後からやってきた女の子に答えた。

「クソ……!!」

歩みを止めていた自身に、捕まった自分に憤りを感じつつ、竜哉は悪態をついた。

「・・・・・・・・・・」

出口を目前にして捕まった竜哉は、セイン達にある一室に連れて来られた。

竜哉を中心に、七人の女性を取り囲んでいる。その中には、あのセインという女の子の姿もあった。女性はみんな、青と紫を基調としたボディースーツを着ている。

「貴様、どこから侵入した？」

「・・・・・・・・オレもしたくて侵入した訳ではない」

「何だと？」

「…………何か事故みたいな感じで…………気がついたら此处にいたんだ」

紫色の短髪をした女性の問いに、疲れ切った様子で竜哉は答える。

この一室につれてこられてから、一時間程、緊迫した状況が続いている。

（クソ・・・・・・・・何だよこ。　周りは皆女子ばかりじゃねーかよ。
）

落ち着いている表情をしつつも、内心焦りを浮かばせている竜哉。

（どうする？　ここにいたら埒が開かないし、いつそ纏めて気絶させてからずらかるか・・・・・・・・？）

竜哉の手が僅かに木刀へと伸びようとした刹那
- - - - -

プシューー

「やあ、待たせたね」

そこへ、白衣を着た紫色の髪の方がやってきた。男の隣には、薄い紫色の長髪の女性が立っている。

竜哉は一旦木刀へと伸びた手を下ろし、男の方を見つめる。

もちろん、警戒は怠っていない。

「自己紹介が、まだだったね。私はジェイル、ジェイル・スカリエッティ。隣にいるのは、私の秘書をもらっているウーノだ」
白衣の男 スカリエッティが、自分と隣にいる女性 ウーノの紹介をした。

「……………蒼月竜哉だ。」

竜哉も少し頭を下げて、自己紹介した。

「それにしても……………」

「ん、何だい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ジェイル・アリエッティとは・・・

随分とまあ、可愛い名前だな。」

「んなつ!？」

スカリエッティは驚愕して固まっている。

「違う! ジェイル・スカリエッティだ!

「え 何だつて?」

「スカリエッティ!」

「とんでもねえ あたしや神様だよ!」

「ふざけているのかね!？」

「良く解つたな」

「いたのかい!？」

と、何故かそんな漫才のようなやりとりを始める竜哉とスカリエッティ。

周りにいた女性たちは何名か除き、ポカンとしたまま固まっている。

そんな彼の姿にさらに追い打ちをかけ、

竜哉は大げさに頭を抱える。

「なんて事だ……。まさか、ジオリ作品のアリエッティ以外にも、同じ名前がいたとは……。」

天変地異の前触れか？」

「だから、ジエイル・スカリエッティだと……。」

ぜえぜえと息を吐くスカリエッティ。

「まあまあ、そんなにカッパとしなさんな。」

「誰のせいかね 誰の！」

「ドクター！ 落ち着いて！」

「んで、何か言いたかったんじゃないの？」

「ああ、そうだったね……。全く君は……。」

咳払いをして、話し出すジエイル。

「キミが拾った黒い球を調べたよ。どうやら、コレは時空移動型のロストロギアのようだ」

竜哉から受け取った黒い球をかざしつつ、スカリエッティが言った。

時空移動型？ いやその前に・・・

「ロストログア？」

聞き覚えのない単語を耳にして、竜哉は首を傾げる。

「次元空間の中には、幾つもの世界が存在する。ロストログアとは、簡単に言えば他の世界よりも進化しすぎた世界の危険な技術の遺産。種類にもよるが、中には次元空間を滅ぼす程の力を持った物もある」

スカリエッティの説明を聞いて、ポカンとなりつつもどこか納得した表情を浮かべる竜哉。

要は、古代兵器と言ったところか・・・。

まるで漫画みたいな代物だな というのが竜哉が抱いた感想だった。

「このロストログアとキミの所持品などを調べた結果、キミは別の・・・いや、異世界からきた『次元漂流者』であると判断した。管理局と疑って、すまなかったね」

その言葉を聞いて、竜哉は小さく息を吐いた。

部屋に連れて来られた時から『貴様！管理局のスパイか！？』と散々問い詰められた。

管理局という組織がどういうモノか解らない竜哉は、とにかく自分

は管理局の人間ではないと主張し続けた。

異世界へやってきたなんて未だに信じられないが、此処へやってきた原因が解り、誤解も解けた。

「いや、謝る必要は無い。疑うのは当然だろう？ それに、まあ、誤解も解けたからイーブンで所だしな」

「それは良かった」

満足げに笑みをするジェル。

これでやっと元の世界へ帰れる。 翔にも会えるだろう。

そう思つて竜哉は、口を開いた。

「じゃあ、その黒い球をもう一度使えば、元の世界に帰れるんですか？」

「……非常に言い難いのだが……」

と言いながらも、スカリエッティは全く困った様子をしていない。むしろ笑みを浮かべていた。

「このロストログアは、魔力が空になっている。どうやら、一度限りの使い捨てのようだ」

「て事は……」

「ああ キミは、元の世界には帰れない」
さらりとスカリエッティが言った。

「それに、帰るとしても、これだけでは無理らしい。」

「……………？　どういう事だよ？」

首をかしげながら、ジェルに問う竜哉。

「どうやら、この球は二球一対らしいね…………　この黒い球と対をなす球を見つけて、調査しない限り、君はずっと帰れないだろう」

スカリエッティはそう説明する。

それに対する竜哉の反応はというと　。

「はあ…………　そうか」

特に落ち込んだ様子もなく、素っ気ない返事をした。

オレの反応が思っていたのと違ったのか、スカリエッティは片眉を上げた。俺を囲んでいる女性達も、意外そんな表情をしている。

「…………感想は、それだけかね？」

「ああ」

「ショックではないのかね？」

「……………全くないと言えば嘘になる。」

竜哉は、しばらく口を噤んだ後、話し出す。

「けど、あまりショックはない。元の世界に未練はないしな」

オレの答えを聞くと、スカリエッティは、感心しつつもむうと眉をしかめている。

「どうやら、

「ただ……………」

「ん？」

「多分、そのロストログアって奴に飛ばされた親友がいるんだけど・

天斗翔という名前に心当たりはないか？」

「ふむ……………」

しばらく考える素振りを見せるスカリエッティ

「残念だが、聞いたことがないな」

その言葉に、少しうつむく竜哉。 やがて、顔を上げる。

「そうか………… 協力、感謝するよ スカリエッティ」

「これから、どうするんだい？」

「…………… あての無い旅でも始めようかな」

寂しげに、呟くように答える竜哉。

行くあてが無くとも、まあ何とか生きていけるだろう。

竜哉がそんな事を思っていると、スカリエッティは何か思いついたらしく、ニヤリと笑みを浮かべた。

「竜哉。私たちと一緒に、此処に住まないかい？」

「は？」

スカリエッティの突然で意外な提案に、竜哉は間抜けな声を出した。ウーノや周りにいる女性達も、驚いた顔をしている。

「ドクター！本気ですか？」

竜哉を取り囲んでいる女性の一人が、スカリエッティに聞いた。

「もちろんさ」

笑みを浮かべながら即答するスカリエッティ。

呆然としていた竜哉は、ハッと我に帰り質問をする。

「……………どうしてオレと一緒に住まなくちゃいけないんだ？」

「この場所を、他の者に知られる訳にはいかないからだよ」

「それだったらオレの記憶の中から、此処に関する記憶を消して、外に出せばいいじゃないか」

竜哉がそう言うと、スカリエッティは口元を吊り上げて笑みを作った。

「ふむ。私はそれでも構わないが、キミはいいのかい？」

「何…………？」

何となく嫌な予感がして、竜哉は思わず険しい顔をする。

「外に出て、この世界に来たばかりのキミに衣食住のアテはあるのかい？」

「……………」

言われて竜哉は、顔を少し俯ける。

確かに、此処を出たら他にアテはない。一応お金は持っているが、世界が違ってから多分使えない。

「それとキミは、記憶の消去を提案したが、下手をしたら全ての記

憶を失う事になるかもしれないぞ？いや、それどころか私はキミの記憶をいじったり、他にも様々な実験を試みたりするかもしれないぞ？」

「……っ！！」

スカリエッティの言葉に、竜哉はバツと顔を上げ、スカリエッティを睨む。

つまり、自分という存在をスカリエッティに思うように弄ばれるという事だ。

スカリエッティは、実に楽しそうな笑みで竜哉を見ている。

「……なるほど、こいつ。

よほどマッドサイエンティストらしい……
さっきの弄り甲斐とは違って、生粋の……

先ほどとは違い、不敵の笑みを浮かべる竜哉。

選択肢は二つ。スカリエッティに従って此処に住まうか、スカリエッティの実験体になるか。

「……此処に住むって言えば、オレに危害は加えないんだな？」

「ああ。その代わり、キミには雑用をやってもらうがね」
とスカリエッティが答えた。

正直、此処に住む事にも不安はある。　が、実験体になるよりはまだマシだろう。

そう考えて竜哉は結論を出した。

「此処に泊まらせてくれ」

竜哉が頭を下げた。

「我が秘密基地へようこそ、蒼月竜哉」

スカリエッティは、両手を広げて竜哉を迎えた。

周りにいる女性達の何人かは、まだ納得していない感じである。

「それじゃあ……チンク。キミが、彼を部屋まで案内してくれたまえ」

「はい」

歳は十歳過ぎくらいで、背が低く、銀色のロングヘアで、右目に黒い眼帯をつけている少女、チンクが答えた。

「竜哉さん。お荷物お返ししますね」

「どうも」

竜哉は、ウーノからバッグを返してもらった。

「では行くぞ」

「あつ、ああ」

呼ばれて竜哉は、チンクの後ろに駆け寄った。

スカリエッティの研究室を出て、チンクは竜哉を連れて通路を歩いていた。

「着いたぞ」

二人は、竜哉が使う部屋の前に着いた。

扉を開けて、部屋の中に入る。ベッドと机だけという、余計な物がないスッキリとした部屋だった。

「私の部屋はすぐ近くだから、何かあったら呼べ」

「……」

竜哉は返事なく項垂れている。

「いつまでも落ち込むな。男だろう？」

そう言つて、チンクは微笑んだ。

チンクの微笑みを見て、竜哉は笑みを浮かべる。

「ああ……すまない」

「気にするな」

そう言つて、チンクは竜哉から離れた。

「ああ。自己紹介がまだだったな。私はNo.5のチンクだ」

「No.5?」

チンクの自己紹介に、竜哉は首を傾げた。

「ああ。私達は『ナンバーズ』という、ドクターに造られた『戦闘機人』だ」

「ナンバーズ? 戦闘機人?」

またも、聞き慣れない単語が出てきた。

「まあ、そこら辺は後で説明しよう。もうすぐ夕食だから、部屋で休んでおけ」

そう言つて、チンクは部屋を出ていった。

部屋に一人残った竜哉は、ベッドの上に座った。そして横になり、今までの出来事を思い出す。

駅前で、ロストロギアと呼ばれる黒い球を拾つてこの世界にきた。ナンバーズと呼ばれる女性達と出会った。もう元の世界に帰れない。他に行くアテはなく、彼女達と一緒に住む事になった。

そして、未だに翔と会っていない。

「オレは……此処でやっていけるのか……?」

胸に不安を抱いて、竜哉は小さな声で言った。

「翔…… お前……」

「今どこにいるんだよ……」

眩いた言葉は、静かに闇へと消えていった。

接触 竜哉ver. 1（後書き）

もう一人の青年は、出会った。そして、親睦を深めてゆく。

「戦闘機人？」

「アタシらは・・・戦う事しか知らない」

「こいよ。相手になってやる」

「ふむ、どうやら君にも、魔力があるらしいね。」

次回 「接触 竜哉ver. 2」

・・・・・・・・・・・・・・・・早く本編書きたいイイイイ！！！！

読者の皆さま、しばしお待ちを・・・・！！

接触 竜哉ver・2 (前書き)

紡がれたのは、一人の青年の決意。

接触 竜哉ver. 2

夢を見た。

親友が、自分が届かない程に遠くに行ってしまう夢を。

「翔ッ！」

ガバリと身を起こした竜哉。

息は荒い。 冷や汗が、背中を伝う。

「大丈夫か？」

プシューと扉を開ける音がして、入ってきたのは

「チンク・・・さん」

「うなされる声が聞こえてな、それで、体調は？」

眉を潜め、心配そうに見るチンク。

それを見てぎこちない笑みを見せつつ、返答する。

「今のところは、大丈夫です」

そうかとチンクは静かに言い微笑む。

「ついてこい、他の面々に会わせる」

場所が変わり、食堂。

竜哉とチンクが到着した時には、もう他の面々が集まっていた。

「それじゃ、紹介するぞ」

チンクが音頭を取り、紹介を始める。

「改めて私から。No.5のチンクだ。何か分からないことがあったら私に言うといい。よろしく頼む」

小柄な体躯に似合わず大人の雰囲気を持つチンク。 澄んだ金色の隻眼に光を反射して輝く白銀の長髪。

皆のまとめ役的な感じがする。

「No.3のトーレだ」

紫色のショートヘアに切れ長の瞳のトーレ。何か、リーダー的な感じがする。

チンクと似たような立場に見えるが・・・

チンクが「柔」なら、トーレは「剛」のリーダーと言ったところか・

金色の瞳と一度交わされた視線は、興味なさげに外された。

「No.4のクアットロですわ　ふふっ、よろしくお願いしますわね」

栗色の髪を両脇で結び、眼鏡をかけてる女性が、クアットロ。

なんだかとても楽しげ。あれ？　今、クアットロと言ったよな？　まさか・・・！

竜哉はビシイと指を指して言い放つ。

「く、クアトロ・バジーナか！？」

「クアットロです！」

ボケをする竜哉に、クアットロから盛大なツツコミが入る。

「No.6のセインだよ。よろしくね」

水色セミロングのセイン。その瞳からは好奇心が窺え、明るい方なのだという印象を受ける。

「・・・No.9　ノーヴェ」

赤色のショートカットのノーヴェさん。鋭い目つきでオレを睨んでいる。

此方は冷静に冷徹にその視線を受け流す。

「No.10　ディエチ……」

栗色のロングヘアーを首の後ろで縛っているディエチ。その表情からはあまり感情が覗えない・・・というか、何かのほほんとした感じだけど、どこか興味深げに見ている気がする。

「No.11のウエンディッス！　よろしくっス！」

赤紫色の髪を後ろで纏めたウエンディ。セインと同じで元気が有り余っている様子。

てか、その？って何よ？　名前は・・・イタリア語での数え方から取ったのかな？

まあ、その場合はウーノの場合、ウノ（UNO）になるけれど・・・

・ おっと、紹介しないと・・・

「蒼月竜哉だ。 今日から皆の世話になる。 解らないことだらけ

だが、よろしくお願いします」

そう言つて、頭を下げる竜哉。

「そんなに固くならなくていいっすよ。 軽い感じで良いっすよ」

「なら、くだけた感じで絡むよ」

笑い声が食堂に響く。

数分経つてから、竜哉は今まで疑問だった事について尋ねる。

「・・・で？ 教えてくれないか？ みんなの事についてさ」

「ああ、そうだったな。 我々は・・・」

話始めるチンク。

「戦闘機人だ」

「戦闘・・・機人？」

話は意外と早く終わった。

内容を纏めると、戦闘機人は、人体に機械を組み込んで身体能力を
向上させ、更に『IS』 インヒューレントスキル

と言う特殊能力まで使えるらしい。 その能力は、個人によ
つて様々ようだ。

自己紹介の時言つてた『No.』 ってのは、造り出された順番を示
していて、数字の通りの姉妹関係なんだと。 ちなみに、ウーノがN
o.1だそうだ。 うん、納得。 それと、No.2は潜入任務とやら
で別の場所に居るらしい。 どんな人なのか気になるが、居ないんじ
や仕方ない。

ふと魔法世界にサイボーグ

科学っておかし

くないか？ と言う疑問が浮かんだが、口に出さない事にした。

そして、ポツリと感じたことを言った。

S i d e : チンク

「ようは、サイボーグか・・・まるで、映画か何かみたいだな」
腕を組んでポツリと呟く竜哉。

その表情は、どこか冷めた表情。

まるで、「それがどうした」とでも言うかのようなその表情に、

私は隻眼となった眼で、ジッと見つめる。

私以外にも何名か怪訝そうに見ている。

見られている事に気付いたのか、竜哉が小首を傾げつつ聞いてきた。

「え？ あの、何か……？」

「驚かないのか？」

「ん？」

私が発した言葉に、思わず聞き返す竜哉。

「私達の事を知って、怖がらないのか？ 言わば私達は……………」

・人を殺す為の道具なんだぞ？」

私は竜哉にそう尋ねた。

私たちは、戦闘機人。

戦う為のみ存在して、戦う事しか生きれない

唯の道具。

それを尻目に、しばらく考え込む動作を見せる竜哉。

やがて、考えが纏まったのか、ゆつくりと私の方を向き言葉を紡ぐ。

「確かに今聞いて知った時は、驚いたさ。そんな映画だかアニメだ

かのフィクションと思っていた事を聴けば」

ゆつくりと言葉を紡いでいく竜哉。

驚いただと？

それなら

「だったら、どうして

「でも怖くはない」

竜哉がその声を発して、言いかけた言葉が雲散してゆく。
怖くない？ 私たちが、怖くないだと？

「どうしてっスか？」

私の気持ちを代弁するかの如く、ウェンディが竜哉に聞く。

「どうしてって……」

途端に隼樹は、黙ってしまう。

何故黙ってしまうのか理由がわからず、私は首を傾げる。

いつまでも黙っている訳にはいかないと考えたのか、竜哉が口を開いた。

「……どうしてだろうな」

「は？」

竜哉の答えに、私はポカンとなる。

「テメツ ふざけてんじゃねーぞー!!」

「ふざけてなんかいないさ」

ノーヴェが怒鳴りつける。

相変わらず、用心深いな……

だが、竜哉はそれすらも動じないで飄々と答える。

「オレの世界じゃ、戦闘機人なんて奴は居なかったから、どう言え
ば良いのか解らねえ。」

でも、オレは皆が戦う為の、殺すだけの道具だとは、そうは思わな
い」

ゆつくりと、吐露するかのように話す竜哉。

「殺すのなら、オレがスカリエッティと会った時でも、今でも殺す
事ができたはずだ」

それが出来ていないならば………」

一度口をつぐみ、一呼吸入れた後言い終える竜哉。

「まだ、心があるのかもな」

心・・・だと？

我々に心があるのか・・・？

戦う為だけに存在する我らに？

頂垂れて瞑想する私、心なんてあるのか？

しかし、その瞑想は・・・

「フン・・・くだらん」

そう長くは続かなかった。

S i d e : o t h e r s

「・・・何？」

竜哉は、険しい眼で、言いだした人物

トーレに向かって睨みつける。

平然とその視線を受けつつ、答えるトーレ。

「我々に心があるだと？ おとぎ話も良い所だ」

「ほう。おとぎ話か？」

「そうだ」

「そうか」

竜哉の雰囲気が一気に変わる。 抜かれた刀のような、鋭い空気に。

まるで、この雰囲気は、そう 殺気。

「おとぎ話のように見えて、本当は真実かもな」

「真実か・・・」

口調は双方軽い、しかし、取り巻く空気は重く、分厚い。

「ならば、私と勝負するか？」

「勝負？」

「そうだ。お前が勝てば、我々に心が有ると認めてやるう」

それがトーレから溢れんばかりに

放出されている。

それを受けつつ、スウと木刀を構える竜哉。

その木刀は、電球の光を受けて鈍く光る。

「こいよ。相手になつてやる」

竜哉が呟くように言った。

そうして

そして、今にもぶつかり合おうとしたその時

「そこまでよ、ユー」

女性の声が聞こえた。

「
・
・
・
・
・
ウーノか」

横目でチラリとウーノを見るトーレ。

「彼は大事な客人よ。怪我させるわけにはいかないわ」

険しい表情でトーレに言うウーノ。

どうやら、止めに来たらしい。

「勝負は預かる」

「
・
・
・
・
・
・
・
あ
あ
・
・
・
」

互いに牽制しつつ、ゆっくりと離れる2人。

内心ホツとしつつも、チンクはウーノに尋ねる。

「……それで、管理局の方は？」

「まだ此方には気づいていないようね」

「管理局……？」

竜哉が怪訝そうな表情を浮かべる。

「なあ、管理局って

」

「私が説明しよう。管理局の裏についてね」

そう言いつつ、ニヒルな笑みを称え、スカリエッティが白衣を揺らし、現れた。

裏？ 表ではなく？

そう、裏だ。 管理局という組織のね。

裏、か。 どの組織でも、変わらないな……

フフ…… そうかね？

まあ、組織なんてそんなものだろ。 それで、何を見せてくれるんだ？

言っただろう。 管理局の裏と。

本当か？ 嘘偽りではないだろうな？

残念ながら「真実」だよ。

最初に言っておくが、今から見る映像は至極、不愉快極まりないものだ。 気分が悪くなったら、すぐに退室することをお勧めするよ

何、ある程度は体制を持っていると自負している。 ちつとやさつとでは吐くような輩じゃないよ

それは、これを見てからでも言えるかね？

そうして、ス

カリエッティは竜哉に見せた。

映し出されたのは、地獄。

生体実験に、培養液に入れられたナニカ。

泣き叫ぶ子供や女性、男性、動物達。

気にもせずに実験を繰り返す研究員達。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その光景を陰しい眼で眺める竜哉

「大丈夫かい？

「・・・・・・・・前言撤回。 やっぱり少しキツイものがあるな」

そう言つて、スカリエッティの方を向く竜哉。

少しだけ、額に脂汗が見える。

管理局は、魔法という力を容易で次元世界を管理している」

「・・・・・・・・何だつて？」

それを聴いて、竜哉は顔を俯かせる。

「これが、魔法？ これが、正義？」

「・・・・・・・・竜哉？」

チンクが心配して駆け寄ろうとしたその時、

「ふざけんなッ！！」

激昂した。

声は辺りに響き渡り、ビリビリと空間を歪ませる。
思わず、下がるチンク。

「何が「管理」局だ？ 自分の世界すらも「管理」出来てない奴らの集まった分際で！」

その言葉を聴きつつ、スカリエッティとはじめナンバーズは畏怖の表情を浮かべる。

その眼に宿るのは、殺意と憎悪 そして・・・
全身から溢れる憤怒に。

今の彼は、化け物のようだった。

今の彼は、そう・・・・・・・・

鬼。

生きとし生ける物全てを喰らう鬼

他に例えるモノがあるのだろうか？

身体から、心から怒り、猛り狂うその姿に。

数分経って、竜哉は漸く落ち着きを取り戻す。

そうして、しばらく考え込むかの様に眼を閉じる。

「スカリエッティ・・・・・・・・」

「ん？」

スカリエッティは目を向ける。

「オレア決めたよ」

「何をだい？」

呟くように、話し出した竜哉に耳をそば立てる。

「お前らの計画に協力する」

「協力？」

「ああ。だが、唯の協力ではない」

瞑想するかのごとく眼をつむる竜哉。

「管理局を………」

スウ、と眼を開き、言の葉を紡いだ竜哉。

ニヤリと笑いながらその眼は、

「ヒネリ潰す」

どこまでも、暗く、冷たい瞳だった。

紡がれたのは、一つの決意。

決意は心に留まり、これから先未来への道の追い風となる。

長く、険しいその道へと。

接触 竜哉ver. 2（後書き）

どうも、暁 零です。

活動報告にも書きましたが、更新速度が遅くなる&感想欄の書き込みを「制限無し」に変更してみました。 もつとも、荒らし等が多ければ今まで通りに「ユーザーのみ」に戻しますけどね。 皆様、悪しからずご了承ください！

今回はキャラ紹介を挟んで、番外編を行ってから本編に向かう予定です。

さらに不定期になりますが、次回もお楽しみに！

キャラ紹介 翔ver・(前書き)

翔のキャラ紹介です。

6 / 2 3 大幅に修正しました。

キャラ紹介 翔ver.

性別：男

一人称：俺

誕生日 6月8日

年齢：19歳

身長：168cm

体重：56kg

髪型：茶色がかった黒髪短髪

眼の色：明るい空色

性格：基本気さくで明るい性格かつお人好しなムードメーカー、滅多なことでは怒らない。

「運動バカ」というイメージを持たれがちだが、実は頭は良い。

が、性格が猪突猛進タイプなので余り知られていない。

悩み：小さい背丈と増えない体重（本人曰く、「もっとガツシリになりたい」らしい・・・）

デバイス：???

好きなもの：甘すぎず、辛すぎない食べ物、料理。

嫌いなもの：大切な仲間が傷つくこと、悪、極端に甘い・辛い物。

趣味：努力・鍛錬・体を動かす。

座右の銘：「質実剛健」

所属：???

階級：???

役職：???

コールサイン：???

魔法術式：???

所持資格：大型バイク免許・普通自動車免許

レアスキル：???

イメージCV 入野自由さん（キングダムハーツシリーズ：ソラ役

機動戦士ガンダム00：沙慈・クロスロード役）あくまでもイメージ。

備考：謎の白い球のせいでミッドチルダに飛ばされてしまい、機動六課にお世話になりつつも親友の蒼月竜哉を探している。 戦闘能力は高く、いざ戦闘になると「猛火」そのもの。ド派手かつアグレッシブに戦う。 竜哉に勧められて一時期剣道・バスケットをしていた。 称号：『蒼き修羅』・・・彼が中学時代に付けられた称号、「ある出来事」がきっかけで竜哉と知り合い、無二の友人となる。

キャラ紹介 翔ver・(後書き)

次回は、竜哉編です。

キャラ紹介 竜哉ver.(前書き)

キャラ設定の竜哉verです。

6/23 一部修正しました。

キャラ紹介 竜哉ver.

蒼月竜哉
そうづきたツヤ

性別：男

一人称：オレ

誕生日 12月28日

年齢：19歳

身長：175cm

体重：63kg

髪の色：黒

髪型：肩より少し長いややセミロングを後ろで縛り、ポニーテールにしている。

瞳の色：濃紺

性格：落ち着いた雰囲気を持つ青年。クールで大人びた所があるが若干天然。ヒトを弄くるのが好き、敵対する者には容赦が無いが、親しい友人に対してはくだけた話し方になる。

悩み：何でも一人で背負いがち（翔曰く）、髪が長いせいか、女子に見られがちな事。

デバイス：???

好きなもの：甘い物、料理、風雅を愛する。

嫌いなもの：「正義」を語る偽善者、正義の味方、極端に辛い物。

趣味：努力・鍛錬、絵描き、写真、

座右の銘：「質実剛健」

口癖「ヒネリ潰す」

所属：???

階級：???

役職：???

コールサイン：???

魔法術式：???

所持資格：大型バイク免許・普通自動車免許

レアスキル：????

イメージC.V 岡本信彦さん（『とある魔術の禁書目録』（一方通行）^{イタ}青の被魔師』（あおのエクソシスト）奥村^{おくむら} 燐^{りん}）あくまでもイメージ。

備考：謎の黒い球のせいでミッドチルダに飛ばされてしまい、スカリエッティやナンバーズ達にお世話になりつつも親友の天斗翔を探している。

・戦闘能力は非常に高く、彰以上の技を見せる。いざ戦闘になると「疾風」そのもの。荒れ狂う風の如く素早さを用いる。さらに、冷静かつ確実に相手を「ヒネリ潰す」戦いを行う。19歳にも関わらず飲酒するなど柄が悪い部分も見られるが本人は「酒は飲んでも煙草はやらねえ」と平然としている。一時期剣道やアーチェリー、バスケ、将棋を嗜んでいた。

称号：『黒き夜叉』・・・彼が中学時代に付けられた称号、「ある出来事」がきっかけで翔と知り合い、無二の友人となる。

キャラ紹介 竜哉ver.(後書き)

今回は、番外編で二人の過去についてです(予定)

もしかしたら、本編がある程度進んでから番外編を行うかも・・・

機動六課入隊！（前書き）

お待たせしました！

予定よりも随分遅れてしまいました・・・

前話から約2ヶ月という遅筆ですが、これからも精進していくつもりです！

OP/EDが決定しました！ 詳細は、後書きをどうぞ！

機動六課入隊！

時の流れと共に景色が流れていく。

朝から昼へ

昼から黄昏時へ

黄昏時から夜へ。

太陽が沈み、月が辺りを照らしだす。

そして、星々が輝き始める。

そんな中、一つの白い光が夜空を駆けて行く。

それは、管理局の『エースオブエース』高町なのはの姿だった。

その背には、一人の青年の姿が。

同年代にしては、やや小柄な体格。168はあろうか？

邪魔にならない程の短く茶色がかった黒髪は夜風になびいている。

明るい空色をした瞳は、どこか挙動不審になっている。

「えーと……」

「ん？ 何？」

ポツリと声を発した青年
翔になのはは首だけ向いて声を返す。

「いい加減降ろしてくれ「駄目だよ まだ怪我酷いんだから」……
・・・むう」

降ろしてほしいとせがもうとした翔の声は、さらに重ねられたなのはの声によって断念される。

因みに、これで5度目である。

「もう、後もう少しで着くからしっかり捕まってる」

「……ん」

拒否権は無いとばかりに言うなのはに翔は仕方なく肯定の意を唱え、邪魔にならない程度にしがみ付き直す。

「（おいおい、勘弁してよ。唯でさえどっという世界なのか解らな

いのに、いきなり変な一つ目ロボットに襲われて、拳句の果てに、
同年代そこの女子におんぶされてんだぞ？」

内心翔は酷く参っていた。いきなり知らない世界に飛ばされたか
 と思いきや、ロボットとの戦闘、後に「時空管理局」と名乗る女性
 に出会い、現在進行形でおんぶされての飛行。

女性におんぶされるといふ男性から見て羨ましい限りの待遇であるが、等の本人は・・・

「（何か・・・めっちゃ・・・恥ずかしい。アン　ンマンじやねーんだぞ！　何がどうして女性の背にしがみついてんの俺！　？　　というか何かもう・・・）」

「（精神的に持たねえええええ！！？？！！）何か色々と感触があるうううう！！　第三の、男しか持たない第三の脚が立ちそうなんだけどおおおおお！！！？？？？）」

かなりパニックになっていた。

元々、明るい社交的な性格なので女子と会話することはあったが、挨拶程度しかなく、別に親しい仲という訳でもなかった。そして、「女性のおんぶ」という彼に取って余りにも不測の事態に頭がオーバーヒートを起こし始めているのだ。

もつとも、彼自身は良く友人に恋愛関係やセクハラ染みた発言でからかったりするが、この男、意外と自身の事は奥手なのである。

「（どうしよう、ち、ちょうど手の所に何やら触れてはいけない感
触の気配が……いや、もちつき……じゃない 落ち着く
んだ俺！　こういう時は数えるんだって兄貴や竜哉が言っていた！
数えれば……あれ？　偶数？　奇数？　素数？　何数えれ
ば良いのか忘れたああああ！！！！）」

正解は素数です。

やばい、やばいぞ……このままだと第3の脚が立ってしまっ

て「やらないか？」だの「アッー！」だのになってしまふ。落ちて
着いて深呼吸して何事も無かったかのようにポーカーフェイスをす
れば良いのだ……」

「あの、声出てるよ……?」

「え?」

THE・WORLD! 時は止まる!

「……」

「(き、聞かれたぁー!?!?!?)」

内心シャウトする翔。

背中からは大量の冷や汗が流れている。

「(ど、どうすれば!? まさか嫌われて地面に落ちて可哀想なト
マトに!?)」

辺りに沈黙が支配する。

やがて、数分経ってから……

「も、もうすぐ着くからそれまで頑張つて!」

「お、おう! 頑張る!!」

どこか慌てた様子で叫ぶなのは翔は千切れんばかりに首を縦に振
る。

レイジングハートがまもなく機動六課に着くと声をかけるまで、終
始2人は赤面し無言のままだった。

所変わって、

「ここが、機動六課?」

「うん、そつだよ」

今の時刻は21:30

翔となのはは、機動六課

時空管理局遺失物管

理部機動六課。その隊舎に居た。

「……税金かけすぎだろ」

「あはは……」

白い眼で思った事を口にする翔に乾いた笑い声を上げるなのは。

「じゃあ、これから部隊長室に向かうからついてきて」

そう言っただすなのはおずおずと翔はついていった。

「高町なのは一等空尉、入ります」

敬礼をし、なのはは部隊長室へと入って行く。

それを横目で見つつ、ゆっくりと周囲を見つつ同じく中に入っていく翔。

「なのはちゃん、お疲れ様や。そんで君か……」

「お疲れなのは。それで……彼だね？」

部屋には二人の女性の姿が。

一人は中央に鎮座する机に腰掛け、先ほど読んでいたであろう資料から眼を離し、翔となのはに向き直る女性

八神は

やて。

茶色の髪をボブカットにし、ヘアピンで一部纏めている。

もう一人は、はやての近くに立っていた。

長い金髪を黒いリボンで束ねている若干スタイルの良い女性

フェイト・テストロッサ・ハラウン。

二人とも、共に茶色の制服を着ている。

「取り敢えず挨拶な。私は八神はやて。ここ、機動六課の部隊長や」

「執務官のフェイト・テストロッサ・ハラウンです」

一通りのあいさつを済まし、はやてがじっと翔を見る。

「じゃ、お名前、聞かせてくれるか？　ボク？」

ぴりり

はやてが翔に対し放った言葉を聴いて、空気が凍ったような感覚を
なのは達は覚えた。

数秒後、プルプルと震えながら彰が小さく言った。

「ボク……と言ったな？」

「え？　せやけどボク「19だよ……」は？」

「だから、オレ、19……」

……ポクポクポクチーン。

「「ええっ!?!」」

「そんな、ちっこいのか？」

プチン

驚きじつと見るなのは達三人。

さらに追い打ちをかける様に言うはやて。

それを聴いて、なのはとフェイトは、何かが切れる音を確かに聞いた。

そう、まるで言うてはならない事を目の前の親友が言ってしまった
ような……。

翔は顔を下に向けている為はその表情は読めないが何かよからぬ事
が起こりそうだと二人は確信する。

「……く……ばれ……」

「え？　何やて？」

小さくしゃべる翔。だが言葉が良く聞こえない為、片手を耳に付け、もう一度催促するはやて。
そして……

「……歯ア食い縛れエ……このチビ狸がア!!」

修羅が現れた。

修羅と化した翔は木刀を手にはやてに襲いかかろうとするも、なのはとフェイトに後ろから羽交い絞めにされる。

「離せ! あのチビ狸 ギツタンギツタンにしてやる!」

「お、落ち着いて翔君!」

「そうだよ! ちっちゃい事は恥ずかしくないよ。私にも小さい子がいるから良く解るよ!」

「……ウガアアア!!!!!!」

「フェイトちゃん!? それ慰めになつてないよ!? むしろ逆効果だよ!!」

「え? そうなの?」

「キイインパツウウウ!!!!!! 後で覚えてろおおお!! その胸揉みしだいてやるうう!!」

「ええ!? そんな……や、優しくしてね?」

「フェイトちゃん!?」

もはやカオスと化した状況にも関わらず、追い打ちをかけ続けるはやて。

「何をそんなに言つとるんや。事実やないけ(棒読み)」

「GUMON! 大体「小さい」と言う事自体可笑しいのだ! たとえ小さくても出来ることだってあるのだ。大きくなくとも、小さくても出来る事があるのだ! 偉い人にはそれが解らないんだああああ……!!!!!!」

「落ち着いて！ 落ち着くの！」

「K I L L T H E M A L L ！」

「「落ち着けえー！ー！！！」」

．．．．．この後30分後、漸くして翔火山は鎮火するのであった。

「ハア．．．ハア．．．．．ゴメン、少し取り乱した」

「ハア．．．．．ハア．．．．．や、やっと治まったの．．．．」

「はやてもからかわないで。話が進まないから．．．」

「あはは．．．．．ごめんな　なのはちゃん、フェイトちゃん」

悪びれる様子無く飄々と謝るはやて。　どう見ても謝る態度では無い姿に後でO H A N A S H Iしようと決めて

前を向くのは。　翔も漸く落ち着きを取り戻した様子。

「それでな、やっと本題に入るんやけども．．．．」

「翔君やったな？　君の元の世界何やけど．．．．」
一拍置き、言いづらそうに言うはやて。

「どうやら地球には無い．．．．　と言うより、地名が存在しないんや」

「．．．．．は？」

「「どういう事なの？　はやて（ちゃん）？」」

余りの衝撃に呆ける翔となのは、フェイト。

それを見つつ、はやてが話始める。

「並行世界．．．．．って聞いたことないか？」

並行世界。

それは簡単に言えば「i f」の世界。

「もしも」と思う数の分存在する無限の可能性。

例えば、もしもミッドチルダに魔法がなかったら、もしも、翔が女の子だったら、

もしも、ミッドチルダと翔たちの世界が同一世界だったら……。

無限に等しい程の多くの「可能性」が有るほど、「並行世界」は存在する。

異世界の場合は、住む種属や世界が異なる等があるが、元をたどれば、其れもまた、

「並行世界の一端」である。（と作者は考えている）

閑話休題。

つまり、翔達の世界となのは達の世界は「限りなく近いがどこか遠く異なる並行世界」なのである。

従って、互いに干渉も接点も無かったのだ。

数時間前に、翔が現れるまでは。

「だからと言って、はやてちゃん。 帰れないというわけじゃ……」

「もちろん、局の方でも捜させとるよ。 せやけど、翔君の居た世界と私らの世界自体別次元の世界やから、世界の特定がちょう難しいそうなんや」

「そんな……」

異を唱えるなのはに肩をすくめて返事を返すはやて。その表情からは、疲れ切った様子を醸し出していた。

「だから、一応時空遭難者として、本局に身柄を拘束させることができるんやけど……」

「だが断る」

はやてが続けて言った言葉に、翔が待ったをかける。

え．．．．．今なんて言った？

断るって．．．．．!???

「どうして!？ 元の世界が見つかるまで、本局で滞在できるんだよ!？」

「確かに、けど俺はそっちで言う漂流者なんだろ？」

「ようは．．．．．ここに俺の居場所なんて無い」

その言葉に絶句する三人。

続けて言う翔。

「居場所すら無いのに、どう生きると？ 何に頼れと？」

ま、あてはないけどなと自嘲じみて呟く姿に悲しくなった。

どうして、そんなことを言うの？

何で、そんな寂しい眼をしているの？

「まあ、日雇いのアルバイトぐらいはあるだろうし、何とか食っていけるだろ。 色々世話になったな。 それじゃあ．．．」

踵を返して部屋から出ていこうとする翔。

待つて．．．．． いかないで．．．．．!

「居場所がないならここで働かへんか？」

「．．．．．」

立ち止まり、顔だけはやてに向ける翔。

呆けたような様子を出すのはとフェイト。

「「はやて（ちゃん）？」」

「どういう、意味だよ？」

「言葉通りの意味や」

一度区切り、じっと見つめるはやて。

「居場所が無いなら、作れば良いっちゅー事や」

「はぁ？」

「んな簡単に言える訳が「言えるんやで、これが」……」

「ま、ウチら六課の保護と囑託ちゅー名目やけどな。大体、アテも無いのに生きるって事次第ちよう難しいで」

「六課に居る時は衣食住の保証付き。任務にも出て貰う。任務が終わったらちゃんと手当ては出す。ちよつとしたアルバイトってわけや」

「……」

「もちろん、元の世界に帰れるようにウチらも尽力を尽くすで。

どや？ 悪い話やないやろ？」

「……だからといって」

3人を見ながら、戸惑った様子で話したす翔。

「だからって、迷惑かけるわけにはいかないよ……。第一そこま」

「迷惑なんて思っていないよ」

「高町？」

「何時だってどんな時だって……キミの力になるよ」

「テストロッサ……」

「翔君」

最初はなのは、次はフェイト、そしてはやてからかけられた声に気づき、ゆつくりとはやての方を向く翔。

「困っているなら、誰かに助けを求めればええ。悩んでいたら、

人に、まあ信頼できる人が一番ええんやけども……聞いてもらえええ。苦しい時は、泣きたい時は気にしないで泣けばええんや。な？ 簡単やろ？」

「……チビ狸……」

しばらく考え込むしぐさをする翔。

そして、考えが決まったのか3人に向き直り、真っ直ぐと見やる。

「……解った」

「ここで働かせて下さい」

「うん、ええお返事や」

「そんな固くならないでよ。 同い年だし」

「あ、それもそうか」

フエイトが発した声に翔がおどけて返し辺りに笑い声が響く。

「じゃ、まずは魔力検査だね、デバイスは……」

暫く考える仕草をするなのは。

「アームデバイスでいいかな。そこからデータを取るつか。今日はもう遅いから、明日検査しよう。 模擬戦も兼ねて」

「解った。 じゃあ……」

3人を見渡し、声を発する翔。

「じゃ、誰と戦えば良いんだ？」

「じゃあ、私と戦って……」

「待て、高町」

入口から聞こえてきた声に一齐に入口を見る。

「話はヴィータから聞いた。 私にやらせてくれ」

桃色の髪をポニーテールにし、不敵な笑みを浮かべた女性。

シグナムだった。

機動六課入隊！（後書き）

如何でしょうか？

作者「全くこのスケベが！」

翔「いや、仕向けたのアンタだろ！？」

作者「今後は、翔と六課メインで執筆する予定です！」

OP/EDが決定しました〜！

OP：「CODE PRIDE」 UVERworld

ED：「汚れなき涙」 THE BACK HORN

模擬戦 VS シグナム（前書き）

長らくお待たせしました。

遅筆……何とかしないと……

あ、今回やや長めです。PCからの閲覧をお勧めします。

模擬戦 VS シグナム

ガキン！ ガッ！ ガッ！ ガッ！

幾度の刃の応戦が続き、剣戟の嵐は続く。

「ははっ！ 翔とやら！ 本当に面白い奴だなお前は！ 柔軟かつ変則な剣戟！ 中々どうして、読みづらい！！」

「・・・・・・・・・・」

その剣撃の嵐を防ぎ、捌きつつ、シグナムは嬉々としてそう言い放った。 対する翔は特に反応する事無く上段から斬りつける。それから互いに連撃、打ち合い、防ぎ合い、切り結びを繰り返し応戦し、防御する。

周囲が何時の間にか無言になっている事に誰も気が付かなかった。

「す、すごい・・・・・・・・」

「ふええ・・・・・・・・」

始まりは、そう、昨夜に遡る・・・

「私が相手しよう」

その一声と共に入ってきたのは、桃色の髪を束ね凜とした表情を浮かべた女性が入ってきた。

「シグナム、勝手に割り込んだらアカンよ」

「すみません主はやて。ですが、この者との勝負は私が」

「……誰？」

「あ、翔君。この人はシグナム。はやての守護騎士なんだ」

はやての注意に謝罪するシグナム。

その光景を横目で見つっ訝しげに眉をひそめ、突然の乱入者に見やる翔にフェイトが説明をする。

「守護騎士……？ まあ、それは後で聞くとして、その騎士様が何用でここに？」

「言っただけだ。私と戦え」

にべもなくその言葉を発するシグナムに呆れた表情を浮かべる翔。

「随分とご挨拶だな。戦闘狂か何かか？」

「貴様、騎士を愚弄するか」

「はい、そこまでにしいや」

今にも斬りかかろうとするシグナムにはやてから待ったがかけられる。

「やめやシグナム。翔君もその辺でしまいな」

「ですが主」

「シグナム」

「クッ 解りました」

「フン」

二人の態度にやれやれと思いつつはやては口を開く。

「今日は遅いから、明日模擬戦って事にしような。フォワードのみんなにも、ええ勉強にもなるやろっし。シグナムも翔君もそれでええか？」

「私からは何も」

「俺からも」

二人の承諾を聞き、はやては笑みを浮かべる。
「ほな、明日つちゅー事で一先ず解散や！」

そして翌日。

時刻は9：00。模擬戦開始1時間前・・・

なのはに連れられ、訓練場の入り口へと足を運んだ翔。

因みに、あの出来事の後、翔ははやてから指名された空いている部屋にて睡眠はとってある。

興味深そうに辺りを見回し、少し落ち着きの無い翔の姿に苦笑しつつもなのははある人物を探す。

「シャーリー！」

「なのはさん！」

なのはの呼びかけに応じ、向こうから駆け寄ってくる茶色の髪をした眼鏡っ子の姿が。

気軽に話している様子からして、どうやら二人は知り合いの様子。

「誰？」

「シャリオ・フィニーノです。気軽にシャーリーと読んでね」

挨拶を交じわう二人。

「シャーリー、デバイスは？」

「あ、ここに」

はい、と手渡されたのは、手のひらサイズの刀を模したキーホルダーのような物。

シャーリーが言うにはデバイスの待機状態に当たるものらしい。

「簡易式だけど、一般の管理局員に支給されている品だから、ある程度は耐久性あるよ」

「どうも」

「じゃ、バリアジャケット（以下BJ）展開してみようか こんな風に」

「レイジングハート セットアップ」

「set up」

辺りに桃色の光が輝き、なのはを覆う。

光が止むと、胸に赤いリボン、白地に青いラインが入ったミニスカ
ートと白ニーソックスの上に、前開きのアウトスカートをつけた姿
のなのはが現れる。

「あれ？ あの時と同じ・・・？」

そう、その姿は、彼が初めてなのはと出会った時と同じ格好だった。
「そう！ これが教導用のアグレッサースーモードだよ」

ニツコリと笑みを浮かべてクルリとその場で一回転してみるなのは。
それを見て慌てて眼を逸らそうとする翔。

「じゃあ、次は翔君だね。大事なのは、BJの『イメージ』だよ」

「『イメージ』・・・」

そう呟き、少しの間眼を瞑る翔。

数分間経ち、イメージが纏まったのかゆっくりと眼を開き右手を上
げ、戸惑いがちに呟く。

「それじゃ・・・セットアップ」

「set up」

眩い光があたりに広がり、覆い隠す。

翔の姿は、赤紫色の半袖ジャケットに空色のインナー、左肩には二
の腕を覆う位の防具、黒みがかった茶色の七分丈のズボン

と動きやすさを重視した軽装な姿に変化してい
た。

「こんな感じか？」

BJのあちこちを見ながら翔はなのはに問いかける。

「うん、すごくカッコいいよ！」

「ホント！　すごく良い！」

「・・・」

なのはとシャーリーの絶賛する声を聞いて、ぷいとそっぽを向く翔。
「別に、嬉しくなんかねーよ・・・」

と、言いつつ顔は綻んでいる翔。

「ふむ、中々様になっっているぞ」

「あ、シグナムさん」

向こうからゆったりと歩いてくるシグナム。

既にバリアジャケットを展開している。

「もう私は準備できている。早くしろ」

「へいへい」

そう答えて、翔は訓練場内へと歩いて行った。

「・・・・・・ハア」

「む、どうした？」

「・・・・・・なんでこんなことになってるんだ？」

「お前の実力を測るために決まっているだろう？」

そう返すシグナムの手には、彼女が愛用する剣型デバイス、レヴアンティンが握られている。

「そうじゃなくてさ。なんで実力なんて測るんだよ？俺、測るところか全くのド素人だぞ・・・・・・」

「ふつ、隠さなくてもいい。お前がガジェットドローンに押し勝ったことは主はやてや高町からも聞いている」

「それも偶然で・・・・・・」

「偶然だとしても事実だ。それに、お前にそれだけの力と技があるのであれば、それをコントロールできるよう導くのも我らの使命。それに、私もお前のような強者と戦ってみたい！」

そう言つて、途端に目を輝かせるシグナム。

絶対最後本音だ・・・・・・

そう思うも、口に出すのはやめておく。

「じゃ、さっさとやりま．．．!?!?」
ブウン! ! ! ! !

言い終わるのも束の間、いきなり斬りかかるシグナム。

「おつと．．．．．」

「!?!?!?!?」

しかし、翔はそれを唯身を捻って避ける。

!?!?!?!?!?

周囲の誰もがその行為に驚愕する。

「シグナムの初太刀をかわした．．．．いや、見きった?」
フェイトがポツリと呟いた。

「(シグナムの攻撃の速さは、私やなのはちゃん、いや、私らで一番速いフェイトちゃんよりも誰よりも一番速い。それを交わしたつちゅうのは．．．あの子．．．)」

その言葉を横で聞きつつ、考え込むはやて。

「わーお、酷いな．．．いきなり斬りかかるなんて」
その交わした本人は眼を白黒させつつ問いかける。

「騎士様は名乗りすら上げずに斬りかかるのが礼儀なのか?」
鞘に収め、振り返りつつ口を開くシグナム。

「済まなかったな。何、かわせていなかったらこのまま一太刀で負かそうとしたのだが」

「ほう．．．．おっかない事だね」

軽口を叩きつつも、眼は互いに笑っていない。

「さて、と……」

刀型デバイスを持ち、正眼に構える翔。
対するシグナムは八双の構え。

「機動六課、囑託魔道師見習い 天斗翔」

「ヴォルケンリッターが将 烈火の騎士 シグナム」

「いざ、尋常に……」

「勝負！」

ガキイイイ！！！！

そうして、騎士と青年はぶつかり合った。

そして、冒頭へと戻る

「す、すごい……」

「ふええ……」

赤髪の少年、エリオ・モンディアルの発した声に、桃色の髪をした少女、キャロル・ルシエが感嘆の声を上げる。

「ティア！ ちょっとティア！ 見てよあの子すごいよ！」

「うつさい、馬鹿スバル！ 言われなくてもちゃんと見てるわよ！」

青髪のボーイッシュな少女

スバル・ナカジマの

黄色い声に、

煩わしく言葉を返す橙色の髪をツインテールで纏めた少女

ティアナ・ランスターが返す。

「なのはさん、あの子って一体……」

「うん……」

シャーリーの発した声になのはもじつと訓練場を見つめる。

ガキン！

ガガガガ……

袈裟切り、突き、振り下ろし、振り払いと

ある時は順手、またある時は逆手と持ち方を変えて攻める翔。

対するシグナムは、両手でレヴァンティンを持ち臆することなく応戦する。

「なのは・・・あの子、翔は、パワータイプ・・・じゃないね」
「うん、翔君のタイプは見たところ・・・」
フェイトの問いに、なのはも頷きながら言葉を返す。

「「速攻タイプ」」

「素晴らしいな。 剣道でもしていたのか？」

止む事無く続く剣戟の嵐の中、シグナムが声をかける。

「しかも、その型は・・・我流か？ 剣筋に一定とした動きが無い」

「そいつは、どうも。 知り合いに、剣道を、やってた奴が、いたもので」

突きから横払い、振り下ろしからの足払いとデバイスを打ち合いながら返す翔。

激しい剣戟に、少し息が上がっている。

剣道と聞いて、微かに眉を上げるもすかさず突きを繰り出すシグナム。

「私の初太刀を防いだのは褒め称えよう。 しかし、だからと言って勝てる程私は甘くは無いぞ」

「へえ、そうですか。 でもそんなの・・・」

グツと剣を持つ手に力を込める翔。

「やってみないと解らないだろ！」

順手から逆手に持ち変え、近くのビルにジャンプし、三角飛びをする。

そして、背後からの奇襲を図る翔。

だが

「まだまだ、甘いな」

「!？」

ドカアアアアアアアアアアン!!!!!!!!!!!!!!!!

ガッ! ゴッ! ドゴオオン…………

「かはっ…………」

渾身の力を込められた回し蹴りを食らい、数十メートル先のビルへと叩きつけられる翔。

壁に叩きつけられ、肺から空気が抜ける。
そのまま、ずるずると床に座りこむ。

「なのは…………」

「フェイトちゃんも同じ…………?」

「うん」

「せやな…………あの子…………翔君もよう頑張ったけど…………」

「「「（（シグナムの勝ちだね（やね）（）（）「「「

意識が朦朧とする。

自分の視界も、薄らとしか把握できない。

「ゲホッ、ゲホッ．．．．．」

蹴られて壁に叩きつけられた影響で、辺りにはもつもと砂埃が舞い、視界が悪くなっている。

翔自身も、B Jが裂け所々赤く染まりつつある。

そこに、近づく気配、コツコツと響く足音。

顔を上げずとも、誰なのかはつきりと解っている．．．

「荒削りで良い動きを見せたが．．．ここまでだな」

両手でレヴァンティンを持ち、上段に構えるシグナムの姿。無感情な声が響く。

「さらばだ」

そう呟き、シグナムは振りおろそうとしたレヴァンティン。だが

「．．．だ．．．な．．．．．」

「？」

微かに聞こえた声に寸での所で止めるシグナム。

「ま．．．．．ってない．．．」

顔を上げた翔の眼にはまだ

「まだ……終わっていない……」

勝利への希望が

残っていた。

「ッ！！」

刹那

ドカアアアアアアアアアアアアアアア
ン・・・・・・・・

気付いた時には、自分の身体が宙に舞っていた。
蹴られた事に気付いたのは、そこからビルに叩きつけられた時。

何が起きたのか誰にも判らなかった。

唯一……模擬選を行っていたシグナムでさえも。

気づいたら、数百メートルも吹き飛び、ビルに叩きつけられていた。

「……………ぐっ……………今……………のは」

驚愕の表情を浮かべるシグナム。

「魔力反応！　こ、これは……………」

「どうしたのシャーリー……………ってこれは!？」

突然の機械音に反応しモニターを見て驚くシャーリーに、さらに驚嘆の声を上げるフェイト。

それに対し、なのは、はやては無言でシグナムが吹き飛ばされたビル、続いて翔が居るであろうビルへと眼を向ける。

所変わってシグナムは
辺りには砂埃が舞い、翔の姿はシグナムからも誰にも判らなくなっていた。

「（早い……………これではまるで……………」

「（１０年前のテストロッサ……………いや、それ以上のスピードか……………」

まあ、今のテストロッサや私にはまだ程遠いが。」

数百メートル先に

眼前に見える翔と目が合う。

「本当に」

久方ぶりの「強き者」に思わず

「高町は……面白い奴を連れてきたものだ」

笑みを浮かべた。

轟！

一陣の風が吹き、砂埃が晴れる。

そして

シグナムの前には

一人の「武士」の姿。

身に着けていた服装はボロボロで所々額や身体から血が流れてはいるが、以前よりも気迫が増している。

右手にデバイス、左手には炎で象られた剣。
身体からは薄らと紫電が溢れている。

「（実体が無い？ それに、その刀……！！）」

「そうか……そういう事か」

何かに納得してさらに笑みを浮かべるシグナム。

「……………さあ」

微かに聞こえたその声は、低い。
それでも尚、ハッキリと周囲に聞こえ、
その眼は

「余り、時間も無い。」

「やろうか、俺達の戦いを」

不敵に笑う

模擬戦 VS シグナム（後書き）

作者「いかがでしたでしょうか？」

翔「作者……取りあえず遅筆を何とかしような 不定期だけれどもさ」

竜哉「……俺の出番はまだか……」

作者「……善処します」

次回予告。

「行くぞ」

「模擬戦の結果は」

「初めまして、スバル・ナカジマです」

「翔 天戸翔」

次回「模擬戦の結果とFW陣との触れ合い」

感想・指摘・アドバイスお待ちしております。

模擬戦の勝敗とFW陣との触れ合い（前書き）

お久しぶりです！

遅くなりましたが、どうぞ！

11/20 後書きに補足を加えました。

模擬戦の勝敗とFW陣との触れ合い

雰囲気が変わった

とシグナムは感じた。

先程とはまるで違う翔の雰囲気を肌で感じ、思わずレヴァンティンを握る手に力が入る。

シグナムの思惑をよそに翔はシグナムから目を離さずに、デバイスと左手に輝く剣を持ちかえた。

唯剣を持ち替えただけの行動にも、シグナムは注意深く見つめる。

（唯二刀流になっただけでは無いな……。あの剣から強い魔力を感じる。

それに、先程から感じるこの感じ、久方ぶりに見る強者の覇気……

主はやて以前からの主に仕えていた時と同じ……）

（だが、剣の刃を折ればどうということではない）

シグナムの思惑をよそに翔は唯じつと佇んでいる。

「……………」

「行くぜ」

ドンッ！

「!?!」

ガキーン！

一声発したかと思った矢先、シグナムに斬りかかっていた翔。からうじて防いだのは、今まで積んできた経験以外にシグナム自身

の「直感」があつてのことだろう。

内心冷や汗をかきつつ、チラリとシグナムは翔の右手を見やる。
橙色をしたその剣はまるで焰のように輝いている。

「ぜやあ！」

「ふっ！」

上段から大きく振り下ろす翔。

それに対してシグナムは、居合の形を取り、目を瞑る集中する。

「！」

カツと目を見開き、真横に一閃する。

翔は両手に持った剣をクロスさせ鍔迫り合いにすることで辛うじて防いだ、デバイスにはヒビが入ってしまう。

鍔迫り合いになりつつもシグナムは違和感を抱く。

（何故だ？ 奴の右手の剣・・・一打ち合っている感じがしない《・・・・・》

まるで存在そのものが無いような・・・！）

はつとなり、見やる。

「そうか、その剣・・・」

「あ、もうばれちゃいましたか？」

にやりと笑いながら言葉を返す翔。

その姿にシグナムも不敵に笑う。

「なるほど、そういうことか」

「ええ、この刀には実体が無い。 何故ならこれは・・・」

「・・・ 魔力で出来た剣!?」

はやてからの説明になのはとフェイトは驚愕し、声を上げる。

「魔力刃とは違うの？」

なのはからの問いにはやては少し思案する表情を見せ、ゆつくりと口を開く。

「魔力刃は大抵はデバイスを媒介にして具現化するんや。フェイトちゃんが良い例やね」

その発言になのはやフェイト、周りにいるフォワード勢も納得顔を見せる。

近接戦用のフェイトのハーケンフォームではデバイスを媒体にし、鎌状の魔力刃を形成する為だ。

「どうやら彼はデバイスだけでなく……大気中の魔力素と自身の魔力を媒介にして魔力刃を具現化した……ちゅーことでええかな。シャーリー？」

「ええ、間違いありません。ですが……」

「うん？ どないした？」

シャーリーは一瞬俯くと、ある事を伝える。

その言葉に、周囲は納得するも驚愕する。

「なるほど。確かに、それならある意味納得できる」

「でも、それでもそれを平気で行う翔は……」

はやての言葉に返事をし、フェイトは模擬戦場を見やる。

袈裟切り、上段、と襲いかかるシグナムを相手に縦横無尽に動きまわりながら応戦する翔。

何時の間にか、先程の鏢迫り合いで折れたであろうデバイスを背中に帯刀し一刀流に戻っている。

目線をはやてに戻し、フェイトが口を開いた矢先

「正直k……」

「規格外だね……」

なのはがフェイトの言葉をくみ取る。

「せやな。でも……」

はやてはじつと自身の守護騎士を見つめ呟くように言った。

「次で勝敗が決まる」

意識が飛びそうになるのを必死で繋ぎ止め、相手へと襲いかかる。

身に纏ったバリアジャケットは互いにぼろぼろになり意味をなしていない。

それは、互いに渾身の力で打ち合った結果だった。

ガン！ キン！ ガッガッガ……！

止む事の無い剣戟の応戦。

模擬戦開始からどの位経ったのかさえ、彼 翔には解らずにいた。

唯一つ 眼前の敵を倒す事しか考えていなかったから。横に大きく薙ぎ払った時に、一瞬シグナムが顔を歪める。

翔はそれを見逃さず、すかさず脇腹に蹴りを入れ、一回転してからダツと居合の形を取ってシグナムに向かって駆ける。

刹那 互いの眼が合う。シグナムの眼は微かに見開いている。

翔はそれを確認し、ニイと笑い、まっすぐシグナムへと迫る。

「これで………終わりだ！」

そう言い放ち、剣を薙ぎ払おうとした矢先に

ガクン！

と体が動かなくなる感覚が。

そして、翔は両膝をつき、地面へと倒れこむ。

その光景が翔の眼にはスローモーションのように動いていた。

あ．．．．．れ．．．．．？

何だこれ．．．．．力が．．．抜け．．．る．．．？

．．．．．もう．．．．．少し．．．．．なの．．．．．に．．．．．
．．．．．

「ち．．．．．く．．．．．しょう．．．．．」

ドサツと倒れた翔。その顔は、どこか悔しそうにしている、どこか嬉しそうな顔だった。

サアアと砂が落ちるような音を立てながら、先程まで翔が手にしていた橙色の剣から魔力が雲散し、消えていった。

この時、翔はすでにシグナムの間合いへと入っており、その切っ先

は

シグナムに鼻先まで後数センチの所だった。

時刻 A M 1 1 : 3 8

一人の騎士と一人の青年の模擬戦は誰もが驚愕と恐れ、そしてわずかな安堵の中 終わりを告げた。

同時刻 模擬戦場 観客席

「・・・リイン、医療班の手配よろしくな」

「は、はいです！」

はやての発した声にリインは慌てて応対する。

「模擬戦はここまで。みんな、各自で今回の模擬戦の感想を報告書に書いて提出ね。それとスバ」

リインに指示を出し、なのはの声を後ろで聞きながら、はやてはゆつくりと模擬戦場を後にする。

通路を歩くはやてはますます思案顔を募る。

「（模擬戦で見せた魔力反応。 わずかやけど、私やなのはちゃんと同格に達してた・・・）」

「はあゝあ。 ほんまに、とんでもない子が来たもんやなあゝ。後で罰として、なのはちゃんのおっぱい揉んでやる」

軽い調子でそうばやき、頭をかきながら、模擬戦場をチラと眺めて

はやては部隊長室へと向かっていった。

AM 11:50

更衣室にて

模擬戦を終えたシグナムは、シャワーを浴びた後一人ベンチに座りこんでいた。

模擬戦自体はシグナムの勝利だというのに、浮かない表情をしている。

そのシグナムの後ろから声をかける者が一人。

「シグナム」

シグナムが振り返ると、赤毛をお下げにした少女、ヴィータの姿。

「そら、タオル」

「すまん」

投げ渡されたタオルを掴み、ゆっくりとした動作で汗をぬぐう。

うーむ、何ともエロい「ふざけるな」　グハツ!?

「・・・何してんだシグナム。急に天井目がけてアッパーなんかして」

「・・・いや、何やら訳の解らない電波を掴んだものでな。それよりもヴィータ、

本局に行ってたんじゃないかったのか」

「本局の方はちゃっちゃと終わった。　帰ろうとした矢先に、はやてから連絡があったから急いで戻ってきたら・・・」

ジト目で見えるヴィータにシグナムはふっと笑みをこぼす。

やれやれと言いつつ、ヴィータが口を開く。

「どうだった？」

「初めてにしては・・・中々の奴だよ」

「カケルつつたか？ まあ、そうだな。初めてにしては善戦したって所か？」

まさか、舐めてたんじゃねーだろ？」

「舐めて戦った訳ではないさ……だが……」

シグナムは肩をほぐしつつ右肩に触れる。

「（後少し……10cmずれていたら……）」

そこには、薄らと切られたような跡が残っていた。

「………ん」

ゆっくりと瞼を開ける。

半覚醒のままぼーっと周囲を見渡すと、辺りには薬品や空きベットが多く置いてある。

「ここは……？」

「六課の医務室よ」

振り返ると、セミロングの金髪をし、白衣を纏った女性の姿が。

「私はシャル。この医師よ」

「……どうも」

小さくお辞儀をして挨拶する翔。

「眠っていた前の事、覚えている？」

そう聞かれしはしの間思案する翔。

「そうか、模擬戦で負けて……」

「そう。全く、シグナムもやり過ぎよ。まだ六課に来て間もない子に……」

そう言つて、膨れた顔を見せるシャル。

そんなシャルに翔が尋ねる。

「俺、どのくらい眠っていたんですか？」

「大体6時間ぐらいね」

「そんなに!？」

バツと窓を見やると、辺りはもう薄暗くなっている。

「随分と無茶をしたようね?　ここに運んできてからずっと眠りっぱなしだったのよ?」

むうと膨れる翔にクスクス笑いながらシャルは言う。

「もう出て行つても?」

「ええ、良いわよ。　幸い、大きな怪我は無く、魔力切れを起こしただけだったから身体には何ともないわ。　バイタルも正常よ」

「はあ、ありがとうございます」

礼を言い、医務室を後にする翔だった。

P M 1 7 : 4 0

模擬戦を終え一人歩く。

やや俯き歩く翔の心中には、無様に負けた敗北感と、言いようのない高揚感が入り混じっていた。

小さくため息をつき、何か食べようと思ひ歩こうとするも、食堂の場所を知らない事を思い出し踵を返す。

途方に暮れて二度目のため息ついたその時

「あ、いたいた!　あの人だよティア!」

「うっさいバカスバル!　耳元で大きな声を出さないでよ!　迷惑でしょ!??」

「でも、ティアナさん。 さつきからあの人が右往左往してますけど・
・・・」

「何か、困っているのでしょうか？」

「キョクル」

はたと立ち止り、頭上を見上げると先程の模擬戦で観客席にいた少年少女達の姿が見えた。

「おい」

「あ、こつち気づいたよティア！ こーんにーちはー」

「こらスバル！ そんな軽い挨拶がどこにあるの!？」

「ええ」

「そうですよ。 初対面の方に対して・・・」

「失礼過ぎますよ。 スバルさん」

「あのー」

「うう・・・ エリオとキャロにも言われちゃったよ」

「自業自得でしょ」

「ティアも冷たい」

「もしもーし」

「ティーア」。 私のブロークンハートを慰めて」

「抱きつくんじゃないわよ。 こんのバカスバル！」

「あ、あのお二人とも！」

「挨拶は・・・」

「・・・・・・・・・・ オイ」

微かに聞こえた声にピタツとじゃれ合いを止める4名。

そのままゆっくりと階下を見下ろすと、プルプル震えながら俯く翔の姿が。

すう、と大きく息を吸って翔は

「じゃれあってないで気づけやテメェらー！ー！ー！ー！ー！」

噴火した。

それから30分後……
階下へと場所を変え……。

「……申し訳ありませんでした」「……」
「ん。 よろしい」

そこには、土下座をする勢いで頭を下げる4人の少年少女とそれに対し腕組みをしながら見下ろす翔がいた。

「そっぴや、まだ俺皆の名前聞いていないんだけど……」

その言葉を聞いて、フォワード陣の自己紹介が始まった。

「スバル・ナカジマ二等陸士です！」

一番最初に、元気良く挨拶をする青髪でボーイッシュな子、スバル。同じく、ティアナ・ランスター二等陸士です！」

橙色の髪をツインテールにし、しっかり者といった印象を醸し出す女の子、ティアナ。

「エリオ・モンディアル三等陸士です」

「エリオ……モンデヤル？ 最近の子は進んでいるなあ……」
「モンディアルです！」

翔の軽いボケに対し、両手を振って否定するのは赤髪の男の子、エリオ・モンディアル。

「キ、キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります！」

少しどもりながらも紹介を終わらせたのは桃色の髪をした子、キャロ。
口。

「俺は天戸翔。こつち風に言うと、カケル・アマトかな？」
ややこしいなあ、と苦笑しつつ頬をかく翔。

それを見て、ティアナが口を開いた。

「あの、天戸さん「翔」・・・え？」

「・・・翔で良いよ。名字だとちよつとむず痒く感じるんだ」
微笑をたたえながら、そうFW陣へと言う翔。

「では、翔さんと。翔さんは何の・・・」

「さっきの翔さんの模擬戦すごかったじゃないですか！ あの右手に持った剣って一体何なんですか！？」

「・・・・・・スバル」

「え、何ティアって何で頭持ち上げているの？ 普通人間の頭って持ち上がらな・・・痛い痛い痛い！！」

「・・・・・・何時もこんな感じか？」

アイアंकロ をスバルにかけるティアナを眺め、どこか遠い目をし、エリオとキャラ口に声をかける翔。

「「あ、あはははは・・・」」

声をかけられた二人は唯乾いた笑い声を上げるしかなかった。

「えーと、ティアナ・・・さん？ 何か俺に言う事があったんじゃないか？」

「テ、ティア」。呼ばれているよ」

「・・・・・・はあ」

渋々とアイアंकロ を解き、翔の方を向くティアナ。

その背後でスバルが「頭が・・・頭が！」と呻いているがお構いなしのようだ。

「翔さんは何のために六課（六課）に？」

ティアナの問いに腕を組んでうゝむと考える仕草をする翔。

「俺はそっちで言う次元漂流者って事もあるけど・・・そうだな」

一旦言葉を区切り、窓からの風景を見つめる翔。

「友達を・・・探すために」

見つめることを止めずに、翔ははっきりと言葉を出す。

「お友達を・・・ですか？」

エリオが近くに寄り、翔の方を向きつつ言う。

「ああ」

それに対し、大きく頷きながら返す翔。

「見つかるの良いですね。お友達が」

エリオの反対側へと移動したキヤロがニコニコ笑いながら翔を見上げる。

その言葉を聞き、ニヤリと笑いながら未だに風景を眺める翔。

「見つけるさ、絶対に――」

「（竜哉、待ってるよ）」

翔の眼の前には、幾千の星が広がる満天の星空が広がっていた。その星空から一つ、流れ星が落ちた。

同時刻

とある研究所 第4闘技場

「・・・・こんなモノなのか？」

「ぐっ・・・・」

そこに広がっていたのは、戦場。

いや、戦場だったと言すべきか。

周りには、女性が数名地面に伏せられた状態でした。

その中心には、やや長めの黒髪をした青年の姿が。

かすり傷一つ無い彼は、周りを見まわし、近くにいた女性を見つけ、一言呟く。

「・・・・興ざめたな」

そう言い放ち、右手に持っていた剣を振りおろそうとしたその時

！

「待つてくれ！」

ボタンと音がし、叫ぶ声がした。

ガキンと甲高い音を上げたのは青年の持つ剣。

足元にいる女性の右頬から 5cm ずれた所に切っ先があつた。ゆっくりと振り向くと、ぜえぜえと息をしているものの此方を見据える、白衣を纏った紫色の髪をした男性とウェーブがかかった薄紫色の髪をした女性がいた。

「君の手助けは幾らでもやろう。だから、娘たちは……」

「ああ、死んではいけないし殺すつもりは無いから安心しろ」

少しやり過ぎたけどな。と彼はニヤリと笑う。

「さっきの話だが……まあ、手伝いはしてやるよ」

「本当かい？」

「助けてもらつたお礼もあるしな」

「……意外と律儀だね君って奴は」

「褒めるなよ」

軽く言葉を交わした後、剣を納めて青年は出口へと歩いて行く。

「じゃ、オレは部屋に戻るから」

軽く手を振り、歩き去ろうとした矢先に、女性の口から言葉が漏れた。

「あなたは一体何者なんですか 竜哉さん」

その言葉にはたと足を止め、振り返る男 竜哉。

そして、不敵な笑みを浮かべて言った。

「何、少し善悪の考えがシビアな……普通の学生さ」

模擬戦の勝敗とFW陣との触れ合い（後書き）

いかがでしたか？

ここでちよつと補足をば。

賛否両論あるかも知れませんが、最後の竜哉の描写は今後の展開の為にわざとそのような描写にしました。もちろん、翔もです。また何故そうなったのかは今後明らかにするつもりです。

次回もお楽しみに！

感想・意見お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5168s/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS 2人の青年

2011年11月20日16時41分発行